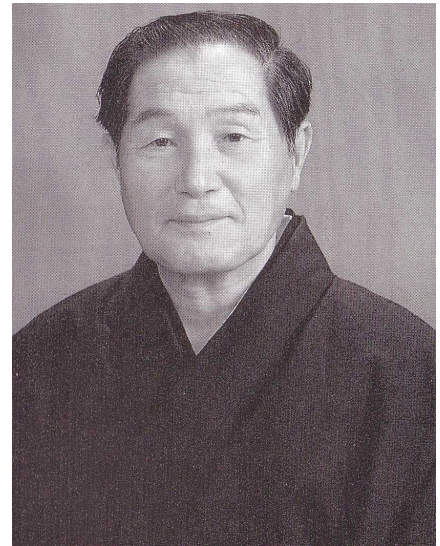


池田 勇治 先生語録

いけだ・ゆうじ 大正3年3月、山形県遊佐町に生れる。小学3年生のとき、斎藤信治先生に剣道の手ほどきを受ける。大正15年、旧制酒田中学(現酒田東高校)に入学、武内重六郎、安藤行蔵の両先生に師事する。昭和8年武道専門学校に23期生として入学、同郷の大先輩、佐藤忠三先生に師事して薫陶をうける。武専卒業後、昭和13年3月に兵役につき満州で入隊。同17年召集解除。その後、堺の工業高校教師をつとめる。同18年再び召集を受けて満州へ。終戦後、繊維会社に就職。全日本剣道連盟理事・普及委員、大阪府剣道連盟常任理事・評議員、関西大学二部剣道部師範、大阪大学剣道部師範、朝日



新聞大阪本社剣道部師範、大阪市立修道館講師、朝日カルチャーセンター千里剣道教室講師、大阪府立体育館養生会師範、勇剣会師範などをつとめる。剣道範士八段。平成3年1月18日没。享年76歳。

剣道は理屈じゃないんだ。自分から求めてガンガンやるんだ。やったら、ハッとわかる。まっすぐに伸びて、大きな大木に成長するか、枝の曲がりくねった小さな盆栽になるかだ。変な癖つけたら盆栽で終わってしまうんだよ。いかに基本に忠実にやるかだ。無理だけでも、無理を承知で破って行かないかん。相手の剣先を避けていたら、いつまでたってもその剣先を破れないんだ。

手前勝手な剣道したら駄目だ。相手がいるんだからね。いやらしい剣道、横で見ているいやらしいなあ、と思われる剣道したら絶対に駄目だ。気持ちのいい剣道でないかね。心を打ち、心を打たれるというのが剣道だね。

ひらめ閃いたら捨てるって言っているんだ。日頃それで稽古するんだ。試合の時にその半分も出たら勝てるって言ってるんだね。

正しい稽古を、少なくとも良いから続けることだ。

稽古は形のごとし。形は稽古のごとし

竹刀振るのに力はいらん。持ち上げるのに力はいらぬんだ。力んだらいかん。さっとおろしたら切れるんだ。

切り返しは、相手の竹刀にガツンガツンぶつきたって駄目だ。手が締まって、竹刀の重さでサッサッと返るようにならないと

どんな人でも、打つ前は必ず手元が上る瞬間がある。そこを打つんだ。そこまで辛抱するんだ。それが溜だ。

剣道は一生のもんなんだ。打った、打たれたというようなケチなもんじゃないんだよ。

剣道は和なんだ。相手がいるんだからね。相手の気持ちを汲むんだ。一人でやるもんじゃないんだ。

わしも一緒だけどね。おたがい剣道でメシ食うわけじゃないんだ。いかに剣道を生活にプラスにするかだね。そのためにはだよ、いかに基本をしっかり身につけておくかだ。若いうちにそれをやっておくんだ。

気位いうもんは、その人の修練の表れなんだ。稽古をやっとしたら自然に備わってくるんだね。

理屈で覚えたって駄目なんだ。剣道はみんな体得なんだ。相手が小手来たから、そんなら抜いたろうなんて考える暇なんてないんだ。相手も生き物なんやからな。打たれまい、打たれまいしているんだ。そんな時に考えて打って行っても駄目だ。捨てるんだ。身を捨てて打つんだ。

若い間は無理をなさい。無理をしている間に打つ機会とか、理合とかが分かってくるんだ。無理をしない稽古は、小さく固まった剣道で終わってしまうんだ

上に懸かるときは、攻められても、そこで「何をっ」って頑張るんだ。それで、今度は打つ機会がなかったも、捨て身で相手を動かすだけの打ちを出すんだ。ズバーンとね。それをくりかえしてたら、精神力、いわゆる「心」というもんが出てくるしね。相手が動じるような打ちが出るようになってくるんだな。相手が受けに回ったら、次々、次々て技が出て来るでしょ・・・

「いい技だな、自分の物にしたいな」思うたらそれを盗んでみることだ。寝ても醒めても、それを頭の中に描いてみるんだ。そうしたら自然に身についてくる

守破離というもんは繰り返すもんだ。何段までが守で、何段までが破で、何段以上が離というものじゃないって、わしゃ言うんだ。いくつになっても基本に戻りなさいって言うんだ。

手は切れればいい。出るのは足だ。裏付けするのは捨てる気持ちだ。

形を見たら、その人の剣道がわかる。刀の振り、足の運び、構え、気位、すべてが出てくる。